

## 社会学の野外実験

—「社会学野外実験」と課外授業の5カ年ノート—

(社会科教育講座) 魁生由美子

### Sociological Exploration

Note on “Social Research in Field Work” and Extra lessons for Five years

Yumiko KAISYO

(平成27年7月6日受理)

抄録：2010年度から2014年度までの5カ年にわたって実施した「社会学野外実験」とこれに関連する課外授業、および学生が各自で行った学習について省察を行った。各年度のフィールドワークについて学生のレポートを参照しつつ整理したことにより、共同学習の成果及び今後の課題が明らかとなった。

キーワード：フィールドワーク (field work)、省察 (reflection)、フィードバック (feedback)

#### 1 はじめに

—本稿の目的と「社会学野外実験」の概要—

愛媛大学教育学部学校教育実践コース社会科教育専修および総合人間形成課程人間社会コースでは、集中講義科目として「社会学野外実験」(2単位)が開講され、1回生から4回生まで複数回の履修が可能となっていた。本稿では、2010年度から2014年度までの5カ年にわたって筆者が担当した「社会学野外実験」とこれに関連する課外授業および課外学習の計画と実施、ならびにその結果について整理を行う。さらに、社会学部等の専門学部で社会学を専攻する学生ではない大学生が学習し、参加する社会学的調査の今後の課題について反省的な考察を行う。

シラバスの概要は以下のとおりである。授業のキーワードは、社会調査 (social research)、フィールドワーク (field work)、インタビュー (interview) である。これらの技法については、次章でごく簡潔に概観する。「授業の

目的」では、「社会学の大きな楽しみのひとつは、『現場』にある。文献・資料による学習を前提として『現場』に向かい、仮説と現実のギャップを発見することは、社会的に理解する近道の一つである。そして各自の具体的経験は受講生それぞれの研究に深みをもたらすだろう。本授業ではフィールドワークを行い、社会調査の基礎を学ぶ」と述べた。「授業の到達目標」は、「社会調査の技法の基礎を学習し、対象とするフィールドの情報を事前に収集する。次にフィールドワークの『現場』で資料収集・インタビュー等を行う。フィールドワーク終了後は収集したデータを分析し、報告書を作成することとしている。「授業時間外学習にかかわる情報」として、「社会調査関連の文献ないしルポルタージュを紹介するのでできる限り多く当たってほしい」と記した。「成績評価方法」は、「フィールドワークの事前準備および実施中の参加態度と、報告書にもとづいて総合的に評価する」とした。受講条件には、

「個人情報の保護と調査対象地・調査対象者へのマナーについては事前学習を行うが、各自自覚を持って徹底すること」と記し、特段の注意を喚起するよう努めた。

以上のシラバスに沿って、例年3月中旬に3泊4日のフィールドワークを実施した。この科目で行うフィールドワークの大きなテーマは異文化理解である。各年度の個別テーマについては「3『社会学野外実験』の計画と実施」で詳しく紹介する。

事前学習として、社会調査法に関連する基本的文献を講読することを参加者に課した。文献は、佐藤郁哉『フィールドワーク・書を持って街へ出よう』(2012)、宮本常一、安溪遊地『調査されるという迷惑 フィールドに出る前に読んでおく本』(2008)を推薦した。また、実際の調査計画からフィールドワークの実施、調査結果のとりまとめと公表にいたるまでの段取りをわかりやすく解説した谷富夫・芦田徹郎編『よくわかる質的社会調査 技法編』(2009)、谷富夫・山本努編『よくわかる質的社会調査 プロセス編』(2010)を勧めた。対象地については後学期開講で主として2回生が受講する「社会学Ⅰ」の履修生との意見交換も試みつつ、担当者から対象地の提案を行った。また、2013年度の場合は、後述するように、総合人間形成課程人間社会デザインコースにおいて1回生後学期から3回生後学期まで必修科目となっている「平和/地域/福祉デザインフォーラム」の題材を踏まえて沖縄県北部を対象地として選定した。

各年度の対象地に関する基本情報及び関連する文献・資料等は、参加者全員に就学支援システム等を活用したメールにより情報の提供を行い、自主学習を促した。対象地でフィールドワークを実施する際、必要に応じて専門家に指導を事前に依頼し、講義または学生引率を実施した。フィールドワーク中の移動時間、待機時間等に意見交換を行い、担当者から適時補足説明を行った。報告書の作成はフィールドワークの日程終了後に参加者各自で行い、メール添付により提出を行った。筆者がこの報告書をまとめたものを作成し、協力者に礼状とともに郵送することでフィードバックを行った。

## 2 社会学における現地調査の基本(the most Basic of Basics)

まず、社会学の立場から実証研究を行う際に行われる社

会調査、とくに現地調査の方法の基本中の基本のみに絞って述べる。社会調査の基本を学習したい場合は、ここで取り上げるテキストとそれらテキストで言及されている古典をあたっていただきたい。社会調査の古典的テキスト群の中でも特に読まれてきた『社会調査』(1984)において福武は、社会調査の原語である social research、social survey、social investigation をそれぞれの方法的特徴に即して解説し、西欧と日本における社会調査の歴史について整理を行っている(福武 1984: 16-32)。ここでは現地調査という用語を用いるが、フィールドワーク、現地踏査、エクスカージョンとほぼ同義である。ただし、「踏査」という日本語表現に権威主義的なニュアンスが含まれる点に留意し、使用しない研究者もいる。佐藤のテキストによると、「フィールドワーク」とは、「参与観察とよばれる手法を使った調査を代表とするような、調べようとする出来事が起きているその『現場』(=フィールド)に身を置いて調査をおこなうときの作業(=)ワーク一般」である。ここでいう「現場」とは、「未開社会から現代社会にいたるまでさまざまな社会や文化」である(佐藤 2006: 38-39)。フィールドワークでは、ICレコーダーをセットした場所で質問リストとメモ帳等を使いながら一問一答形式やそれに準ずる形式で進めていくフォーマル・インタビュー(=構造化インタビュー)や、調査対象のポイントが明確化される以前の段階で行う機器、道具を用いないインフォーマル・インタビュー(=非構造化インタビュー)を行う(佐藤 2006: 91-95)。

現地調査を行うにあたっては、事前に綿密な情報収集と予備調査を行うことが基本である。現地では情報収集を行いながら資料収集を進めつつ、さらに綿密な調査を行う。福武の古典的テキストが半分の紙幅を「社会調査の意義」と「社会調査の計画」に割いている通り、社会学のプロフェッショナルが行う社会調査は、先行研究に関する文献・資料調査を徹底して行ったのち、仮説(research question)を立て、その検証を行う。調査の方法は質問紙法等を用いる量的調査、あるいは参与観察(participant observation)やインタビュー等の質的調査、または複数の方法を横断的に用いることになる。

「社会学野外実験」は体験型社会調査であり、指導のための時間が限定的かつ集中的にならざるを得ないので、履修する学生は実際に現地で歩き、情報収集を行いながら

学ぶことになる。この際、学生の事前学習を含む予備調査をどの程度促進できるかが問われる。個別メールおよび就学支援システムを用いて、最低限のブックリストを提示するとともに、インターネット上で公開されている論文、動画、画像等資料の所在を指示し、事前学習を促した。またフィールドワーク中のインタビューは大部分が一回限定となるので、インフォーマル・インタビューをどの程度まで活発に行えるかが鍵となる。つまり参加する学生が積極的な質問を行えるかどうか、そして対象者の解説を聞きなが

らわからないことを即時に意識化し再び質問の形で言語化できるかどうか、さらにそれを内言のままでもめ置かずに発話できるかどうか「現場」で試されることになる。

### 3 「社会学野外実験」の計画と実施

2010年度から2014年度までの「社会学野外実験」の実施概要は以下のとおりである。各年度において協力依頼を行った組織・団体と現地調査の内容は次のとおりである。

表 「社会学野外実験」の実施概要(2010年度～2014年度)

実施年度 (参加者数)	対象地	主なスケジュール
2010 (5)	韓国ソウル市	3/22 松山空港→仁川国際空港 3/23 西大門刑務所歴史博物館、仁寺洞、明洞 3/24 清溪川、社会福祉法人幸福創造、Kis' AU Café 3/25 市内エクスカージョン
2011 (16)	大阪市	3/13 各自で現地集合 3/14 通天閣、西成警察署、大阪人権博物館 3/15 コリアタウン(御幸森商店街) 3/16 市内エクスカージョン
2012 (5)	沖縄県 那覇、南部	3/13 牧志市場 3/14 沖縄国際平和研究所 3/15 沖縄県平和祈念資料館、平和の礎 3/16 市内エクスカージョン
2013 (4)	沖縄県 北部、那覇	3/13 普天間公園、沖縄国際大学、辺野古 3/14 沖縄愛楽園、名護ヘリパッド予定地 3/15 那覇国際通り 3/16 市内エクスカージョン
2014 (6)	大阪市	3/11 各自で現地集合 3/12 コリアタウン(鶴橋～御幸森商店街)、じゃがいも子どもの家 3/13 通天閣、西成警察署、大阪人権博物館 3/14 市内エクスカージョン

### 3-1 2010年度—韓国ソウル市

韓国ソウル市のフィールドワークでは、韓国の都市部における社会問題、すなわち、高齢化、単独世帯化、女性に対する暴力と貧困に対応する地域福祉の現場を訪問するとともに、韓国の学生が必ず訪問する歴史遺産である西大門刑務所の見学を個別テーマとして設定した。人間社会デザインコースの4名、社会科教育専修の学生1名が参加を表明し、往復航空機と宿泊を含むツアーに参加する手続きを行った。筆者は韓国安東市において別件の調査業務を行ったのちソウル市に向かい、仁川国際空港にて学生の到着を出迎え、確認を行った。2011年3月11日の東日本大震災直後の日程であったが、予定者全員が集合した。宿泊先は全日程、汝矣島の国会議事堂と麻浦大橋のほぼ中間地点に位置するホテルである。地下鉄の最寄り駅から徒歩10分ほどの距離にあり、周辺にビジネス街とそれに近接する飲食店等がある。海外が初めてという学生もおり、貴重品の管理、近隣のコンビニエンスストアの利用方法等についても事前の注意を行った。

二日目は戦前の日本帝国主義を象徴する負の歴史遺産である西大門刑務所を訪問し、韓国人が義務教育課程で必ず学習する3.1独立運動の柳寛順（満17歳で獄死）をはじめ、政治犯として収監され、拷問を受けた当時の朝鮮人活動家の足跡について見学を行った。西大門刑務

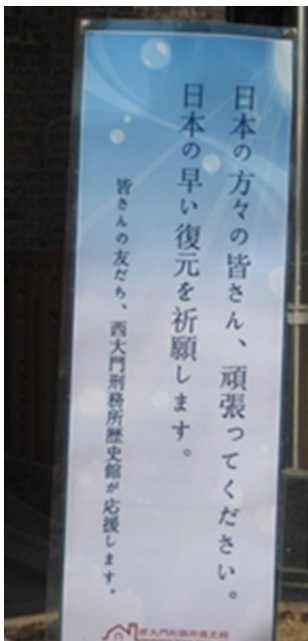


図1 西大門刑務所にて筆者撮影

所、そして観光客を含めて若者が集う繁華街である明洞、民芸調の雑貨や飲食店が多い仁寺洞、その他市内各所には被災した日本への支援メッセージが掲げられていた（図1）。

三日目に訪問した社会福祉法人幸福創造の金玄勲理事長には、

2009年3月、特別養護老人ホーム園田苑理事長であった中村大蔵氏の紹介を受けて訪問して以来、韓国の地域福祉の研究に関する最新の動向と具体的な地域福祉事業についての助言を得ている。幸福創造は、1997年1月に博愛在宅老人福祉館の名称で開園した施設を2006年12月に改称し、その後、広義の地域福祉サービスを展開してきた（金 2008: 88-97）。現在は、デイサービスと居住サービスを中心とする高齢者対象の地域ケア、韓国の盆にあたる秋夕やクリスマス等の年中行事の際に行う低所得者高齢者、独居高齢者を対象とする食事会や食材配達、ドメスティックバイオレンスの被害女性を対象とするシェルター運営等の女性福祉、地域の子育て支援活動等を行っている。金理事長は苦学しながら日本に留学し地域福祉学を学び、帰国後に福祉事業を立ち上げて以来、行政や医療機関との連携をはかりながら、ソウル市恩平区における地域課題に対応する多彩な福祉サービスを開発してきた。今回のフィールドワークでは、なだらかな曲線や明るい色彩を多用した開放感のある施設で行われている高齢者デイサービスと居住型の養護サービスを見学した。その後、会議室にて金理事長を交えたディスカッションを行った。金理事長は教育学部の学生のために、地域の女子孤児院である徳善園、幸福創造が国際事業の一環として展開する Kis' AU の新拠点となるカフェの見学も準備して下さった。金理事長から学生には、「このフィールドワークを機会に、どんな形であっても韓国に関心を持ち続けて、友好的に関わり続けてほしい」という強いメッセージをいただいた。

### 3-2 2011年度—大阪市

学生にとって交通費負担が軽いこともあってか、大阪市調査には専修・コースを超えて16名の学生が参加した。大阪市は複数の異文化体験を行えるというメリットを有する都市である。JRの環状線を利用し、鶴橋駅を中心とする在日コリアンの集住地域と大正駅から延びる沖縄出身者の集住地域を往来すべく阿波座のホテルに参加者全員が宿泊した。

二日目、再開発され観光地化した通天閣の周辺を歩き、そのまま西成警察署、三角公園、あいりん労働福祉センターをたどった。大阪ミナミの名物である動く看板仕様の装飾がひしめき若者や家族が楽しめる観光の街となっ

た通天閣から、日雇い労働者とホームレスの街へと歩く1時間程度のフィールドワークである。16名の学生と一緒に移動すると目立つので、いろいろな市民が声を掛けてくることになる。フィールドワークでは、通行者の顔が入る写真の撮影はしない、もししたい場合は許可を得るように指導するが、西成ではカメラを出さないように注意を行った。ただし西成警察署の建物のみは撮影可能とした。西成のフィールドワークに集中する場合は、大阪市立大学の先端的都市研究拠点である「西成プラザ」、NPO 団体等に解説を依頼することができる。このチームでは、同日中に大阪人権博物館と大阪市大正区の沖縄県出身者集住地域を訪問するために割愛した。

JR を利用し、新今宮駅から芦原橋駅に移動した。「芦原橋界隈は、その昔く西浜」といわれた西日本最大の被差別部落」である。大阪人権博物館に向かう道沿いには、太鼓に関連するオブジェが賑やかに配置されている。これは「人権・太鼓ロード」を基幹としたまちづくり事業の一つでもある(趙 2012: 162-165)。浪速の皮革業が生産する太鼓、そして「靴、ベルト、鞆、雪駄、膠(にかわ)etc.」の原料は近隣の屠場が供給したという<sup>1)</sup>。趙は「私らがコドモの頃は『膠のにおい』が町に立ちこめておりました。雨が降ると路地が浸水し、床上浸水など日常でした。それが70年万博の頃、水も浸からなくなり、臭いも消えました」と述懐している。大阪人権博物館は、「戦前、西浜の人々が闘い取った」栄小学校の後である。「人権の歴史がよく分かる素晴らしい展示」があり、「視聴覚メディアも豊富」で、『ガイド・ボランティア』のおじさん達の話は必聴です」と趙が指摘する通り、我々のフィールドワーク当日も時間の許す限り、展示物の説明とともに、市政に対する様々な意見も含めてガイドの方々は惜しみなく語り聞かせて下さった。なお、同博物館訪問にあたっては訪問予定の日時を事前に電話で連絡した。我々を担当して下さいった複数のガイド・ボランティアの方は、この連絡を聞いて遠方からの訪問を歓迎して下さい、年休を取って参加したという方もおられた。浪速のホスピタリティである。

その後、再びJRで大正駅まで移動した。大正駅から大阪府道173号線を南下すると沖縄食材を扱う商店等

が集中し、生活感が濃厚な沖縄県出身者の集住地域である小林、平尾に行くが、バス移動が必要であるため割愛した。大正駅近くの沖縄民謡登川流研究保存会師範である宮里政則氏と玉城流光乃会関西支部教師を務



図2 猪飼野にて筆者撮影

める宮里政子氏が経営する沖縄料理と沖縄音楽の店かりゆしで会食を行った。この集住地域の沖縄料理店にはステージが設けられていることが多いが、かりゆしも同様にライブができる仕様となっている。沖縄料理について調べてくるよう事前に指示を行い、当日は学生が主体となって注文するように促した。将来教職をめざす学生のために、宮里氏が沖縄民謡の解説と実演をして下さり、貴重な異文化学習の機会となった。

三日目の午前中は、個別フィールドワークに当て、午後は韓国・朝鮮の生活物資全般が入手可能であるという鶴橋駅から御幸森商店街まで広がるコリアタウン一帯のフィールドワークを行った<sup>2)</sup>。鶴橋は済州島出身者を中心として在日コリアンが集住している。行政区である大阪市生野区における人口の約4分の1がコリア系住民(韓国籍、朝鮮籍、日本籍、無国籍の市民)であり、多文化が根づいた日本最大の在日コリアン集住地域である。会食は今里筋の韓国家庭料理の店である新・京愛館にて行った(図2)。

### 3-3 2012年度-沖縄県那覇、南部

2012年9月9日(日)、沖縄の宜野湾海浜公園で開かれた「オスプレイ配備に反対する沖縄県民大会」には10万1千人(主催者発表)が参加し、会場は日米両政府への県民の「怒りのレッドカード」で真っ赤になっていた。これを受けて、沖縄から平和を考えるというテーマで参加者を募った。松山-那覇の航空便を利用し、那覇市の国際通りを宿泊拠点とする計画である。人間社会デザインコースに在籍する2回生5名が参加を表明した。

沖縄訪問が初めてという学生がほとんどである。参加学生のうち1名は沖縄の離島である久米島出身であり他4名は愛媛県等四国出身者である。参加学生が確定する以前に、4日間の計画を作成したが、このフィールドワークのメインとなる講義を依頼した大田昌秀氏もまた久米島出身である。

周知のとおり大田氏は琉球大学法文学部に在籍しながら沖縄戦を検証する著作群を執筆する研究生活を過ごし、その後1990年から8年間、沖縄県知事を務められた。1991年1月、大田平和総合研究所を開設し、2013年6月に特定非営利活動法人沖縄国際平和研究所を設立した。この間、2001～2007年まで社民党所属の参議院議員も務められた。本来休館日である研究所の展示コーナーを開放していただき、大田氏がアメリカ国会図書館等から収集した貴重な資料を見学した。沖縄戦、広島・長崎の原爆写真等国内の戦争写真と沖縄の歴史と戦後の歩み分かる写真、そしてドイツのホロコースト、朝鮮戦争や日中戦争のジェノサイドの写真資料が詳細な説明とともに展示されている。この常設展示は、沖縄県平和祈念資料館と同様、展示物の一点一点が一見するだけでは消化し得ない膨大な背景を持つ、衝撃的な一瞬をとらえた歴史資料の集積である。限られた資料閲覧の時間を最大限生かす学習活動にするために、事前学習を徹底する旨メールで指示を行い、「社会学Ⅰ」の授業終了後に学生との細かな相互確認を行った<sup>3)</sup>。

資料閲覧後、研究所の会議室で感想レポートを書いた。久米島出身の学生は「日本とアメリカの戦争なのに、日本兵による住民虐殺もあったという記事を見た。『久米

島事件』とも言われているが、私の住む久米島において日本兵が住民をスパイと決めつけ殺害している。何のための兵士なのかと思う以前に、やはり何のための戦争だったのか。本当に疑問が残る。沖縄の人々にとって誰が敵で誰が味方かわからない」と書いている。

レポートが大部分まとまった時点で、大田氏による講義を受けた。大田平和総合研究所編『「沖縄」関連資料 沖縄戦及び基地問題』（2012）に即して解説して下さった。これに加えて、永井隆博士、『あたらしい憲法のはなし』等戦後日本の平和問題に関して、大学生が知っておくべき基礎知識について分かり易く話して下さい、筆者と同様に学生も、一語も聞き漏らすまいという気迫でノートを取った。さらに知事として尽力した平和の礎（1995年6月23日建設）に関連して、当時知事室を訪問した韓国人遺族団が背を向けたままで無言を通し、「加害者」側の代表である知事に対して強い抗議を表明したというエピソード等、予定時間を超えて講話して下さい。沖縄戦で死亡した朝鮮人は約1万人と推計されているが、平和の礎に刻銘されている韓国人、朝鮮人は447名（2012年度時点、2014年度も同じ）に過ぎない。講義のまとめでは、鉄血勤皇隊の学徒兵として従軍した沖縄戦末期の、瀕死の状況下での経験が研究を志すきっかけとなったという印象深いエピソードを学生たちに語って下さった（図3）<sup>4)</sup>。

三日目は、那覇市から車で南下し、糸満市の沖縄県平和祈念資料館、平和祈念公園、平和の礎、摩文仁の丘を見学した（図4）。平和の礎の刻銘碑が並ぶ入り口には、日本語に加えて英語、朝鮮語、中国語で「平和の礎」と



図3 大田平和総合研究所にて筆者撮影



図4 摩文仁にて筆者撮影

示されている。日本軍の軍夫として沖縄戦で犠牲となった朝鮮半島出身者を祀る韓国人慰霊塔(1975年建立)には韓国各道の石が並べられ、慰霊塔前のスペースには朝鮮の方向を示す矢印が施されている。これらが点在する広大な敷地からは水平線を見渡すことができる。平和の礎に刻銘された241,167名(2012年度時点)のうち11,690名の戦没者が糸満市から出ており、また戦跡のモニュメント「ひめゆりの塔」でも知られるように、そこは沖縄戦最大の激戦地であった。

### 3-4 2013年度—沖縄県北部、那覇

人間社会デザインコースの必修科目である地域・福祉・平和の各フォーラムは2013年度の後学期、共通テーマ「高江から『生きる、住まう』を考える 人間社会デザインコースの学びを問う」を設定し、当時市内の映画館で上映された三上智恵監督作品「標的の村」(2013)を履修者全員が鑑賞するよう指示した。同時に、社会科教育専修の学生にも映画鑑賞と授業へのオブザーバー参加を勧め、教員養成課程の学生と生涯学習課程の学生による共同学習と討議の場をつくるべく呼びかけたが実現しなかった。ただし、フォーラム履修学生以外の4回生や他専修の学生の多くが映画を鑑賞した旨報告してくれた。このフォーラムを中心とする学習をさらに展開すべく、社会学野外実験では那覇空港から北上し、沖縄本島の中部から北部に点在する軍事基地、軍事関連施設を見た後に再び南下し、那覇市にて現地解散とする計画を作成し、参加を呼び掛けた。平和フォーラムがすでに沖縄でのフィールドワークを実施したこともあってか、多数の参加を想定していた人間社会デザインコースの学生からは希望者がなく、社会科教育専修2回生の4名が履修の手続きを行った。那覇市から北部への移動と、途中の各軍事関連施設の見学は公共交通の利用が大変難しく、このフィールドワークにおいてはタクシーの借り上げを行い、移動時間を短縮することにより効率的な社会見学となるよう計画を行った。3月中は観光客が多いため1月末までにタクシー会社数社に連絡し、一日目の那覇～名護への北上便と二日目の沖縄愛楽園～高江への巡回便を予約し、ファクシミリにて各日の目的地と経路の確認を行った。

一日目の移動と見学は、那覇空港から普天間公園～沖

縄国際大学～道の駅かでな～辺野古～道の駅許田～名護市内の宿泊先までの6時間に及んだ。普天間公園の高台からは普天間基地を一望することができる。当日、数基のオスプレイを目視することができた。普天間基地に近接する沖縄国際大学では、2004年8月13日(金)、本館建物に米軍ヘリが墜落・炎上する大事故が発生した。保存された墜落現場と経緯説明の掲示物を見学することができる。沖縄国際大学は私立大学であるが、米軍ヘリ墜落直後に米軍により現場は強制封鎖され、立ち入り禁止となった。学長の立ち入りが許可されたのが事件後約28時間後、わずか10分の許可であったということを書者は初めて知った(詳細は沖縄国際大学ホームページ参照 [http://www.okiu.ac.jp/gaiyou/fall\\_incident/](http://www.okiu.ac.jp/gaiyou/fall_incident/))。

普天間から嘉手納へ向かう道沿いは、米軍基地を守る有刺鉄線が施されたフェンスが延々と続く。道の駅かでなでの休憩を経て辺野古へと向かい、やはり有刺鉄線とコンクリートの頑強な塀で遮られた基地予定地を見学した(図5)。夕刻が迫り、座り込みキャンプのテントは無人であったが、多数の市民が基地移設反対の運動を行っていることが分かった。密度のある日程の終了後、投宿する名護市内のホテルで職員の方に食堂を訪ね、至近の海牛にて沖縄料理の夕食を摂った。



図5 辺野古にて筆者撮影

二日目はまず、「社会学野外実験」の前半部分に同行した学内外の研究者2名の発案により、国立療養施設沖縄愛楽園を訪問した。全国退所者連絡会代表を務める元入所者、平良仁雄氏をはじめ3名のボランティアガイドの方々が、丁寧な案内と解説をして下さった。久米島で

暮らしていた9歳のときにハンセン病を発症し、航路沖縄愛楽園に強制的に入所させられ、以降どのような思いで生きてこられたのか、平良氏は痛切な体験を話してくださいました。近年、社会学領域では、中村文哉、桑畑洋一郎が沖縄愛楽園を定点として経年的な実証研究を行っているので参照していただきたい(中村 2013)(桑畑 2010)。

沖縄愛楽園を辞した後、東村高江のヘリパッド建設予定地で建設反対運動を行っている市民が設営したテントを訪問し、資料の収集と署名を行った。「標的の村」にも登場した子育て中の女性がちょうどゲート前テントの当番でおられたので、直接お話を伺うことができました。SLAPP( Strategic Lawsuit Against Public Participation)裁判に巻き込まれたことや、反対運動に反感を持つ地元住民が、何らかの政治団体から金銭供与を受けた動員であるという噂を流していること等、生々しい現場の話をお伺いしました。ゲートに出入りする米軍車両にカメラを向けようとする、やめるよう厳しく制止された。どのようなことでスラップ裁判に巻き込まれるのかわからないからである。

「標的の村」のライブシーンで登場した高江のカフェ山颯(現在閉店)を経て、今帰仁城跡を見学した。借り上げタクシーの運転手である嘉数氏にガイドをしていただき、結局、一日の行程は総計8時間に及んだ。ホテルへの帰途では沖縄の郷土料理である山羊汁にまつわる数々のエピソードをご教示いただいた。いったんホテルに帰着後、再び近郊タクシーに分乗して山羊料理専門店をめざした。前日3月13日(木)が高校の合格発表であったために、市内の名店は行く先々が早々に売り切れたということであった。北部最大の繁華街であるみどり街に戻り山羊料理専門店をあきらめかけたタイミングに20時開店の「勝山ヒージャー」に行き当たり、入店することができた。子どもの高校合格祝いのために前夜は休業したというその店で、沖縄本島北部やんばるのホスピタリティに溢れた山羊料理で夕食を摂った。

三日目の自由行動では、学生は名護の美ら海水族館を訪問し、午後は那覇市内にて再集合し、国際通り至近で夕食会をもった。

### 3-5 2014年度—大阪市

2011年度に行った大阪市フィールドワークとほぼ同様の目的地を訪問する計画である。参加者は、人間社会デザインコースの2回生6名である。2014年度は、目的地に関する知見を蓄積した団体に行程の一部について引率と解説を依頼し、より専門性の高いフィールドワークとなるよう大阪市生野区で市民活動を行う複数の在日コリアンに協力を仰いだ。2014年11月9日、「社会学野外実験」の計画に関する指導助言のためにNPO法人聖公会生野センター総主事呉光現氏を松山に招聘し、計画上のアドバイスをいただいた。また翌10日に筆者が担当する社会学野外実験、社会学I、社会学II、社会学入門(共通教育)の課外授業として「現代日本の人権問題—『自分を好きになる』『キム・ホンソンという生き方』著者、金洪仙先生に聞く」と題した大阪国際大学等で教鞭をとっている金洪仙氏による講演を開催し、同行した宋君哲氏(神戸朝日病院事務局長)、宋毅氏(合同会社ニューエイジ代表)、鄭甲寿氏(公益財団法人ワンコリアフェスティバル代表理事)各氏から、大阪市生野区で行うフィールドワークと事前学習についてさらに詳細なアドバイスをいただいた。著述活動を始めとして各領域で多彩な活動を行う各氏からの助言により、2014年度の大阪市フィールドワークは、より具体的な多文化の在り方と地元市民のネットワークを垣間見ることのできる、貴重な機会となった<sup>5)</sup>。フィールドワークの内容は以下のとおりである。

宿泊は知人宅に寄宿する2名以外、鶴橋駅至近のホテルに学生が各自で予約を行った。到着した一日目は新今里のいまさを訪問し、お好み焼きと自家製キムチで夕食を摂った。食事中、呉光現氏の勧めを受けて来店した旨を話すと、厨房を取り仕切る高春子氏が自筆で書き入れる様式の名刺を下さった。夜間中学で初めて文字を学んだこと、現在は高校に通って学び続けているということ、済州島四・三事件(1948年)の生存者であることを教えて下さった。名刺に書き入れられた丁寧な署名には万感が溢れているように見えた。文字を知り原稿用紙を前にして何か書こうとすると、忘却したはずの悲しい記憶が次々に思い出されたという。大阪市立東生野中学校夜間学級在学中の2013年に「泣きながら書いた」作文、「私が見た4.3事件」が部落解放文学賞記録部に入賞し



たという話に、学生も泣いた。

二日目は、先述した課外授業訪問団で知己を得た鄭甲寿氏によるエクスカージョンである。鶴橋駅周辺から御幸森商店街にいたる路地を、在日コリアン関係の書籍が豊富な高坂書店～民族服専門店～司馬遼太郎生家跡～御幸森神社と辿りながら、古代から現在までの歴史を持つ在日コリアンの街「猪飼野」の文化と現在について詳細な解説をしていただいた。御幸森商店街の韓国食材店のバックヤードでプロの解説を聞きながら、漬けたてのキムチを試食したのは筆者にとっても初めての楽しい経験であった。コリアタウンの食堂では、2014年に30年目を迎えたワンコリアフェスティバルについて、大事業を始めたきっかけや折々のエピソード、その背景となる韓国、朝鮮、日本の政治的動向と、ワンコリアフェスティバルが目標とする東アジア共同体の構想について語り聞かせていただいた。

昼食後、第一グループは社会福祉法人ストローム福祉会じゃがいも子どもの家、第二グループは桃谷エクスカージョンと、それぞれ現場の学習を行った。とくに、じゃがいも子どもの家では、杉本信明監督作品「自転車で行こう」(2003)のシーンと同様、障害を持つ子どもと持たない子どもが一緒になって、思い思いの時間を過ごしたという。ある学生は、「どの子が障害を持ってどの子が持ってないか分からないくらいに一緒に遊んでるでしょ。それが一番だと思いますね」という指導員の言葉に感銘を受けたとレポートに書いた。「それはいまままで私が目にしたことなく、そして衝撃を受けるほどにすばらしい光景でした。帰り際、S君に『今度は何曜日に来るん?』と言われ、言葉に詰まってしまいました。・・・『またいつでも遊びに来てください』といただけたので、地元に戻ったときにでも、また行きたいと思っています。」と書いた学生が、今後何らかの形でじゃがいも子どもの家の子どもたちや、同じように出合いを待っている各地の子どもたちと、自分から接点と機会をつくり出すことを願ってやまない。夕刻、拠点の鶴橋に集合し、韓国料理の定番の一つである海鮮鍋やカムジャタン、味付きの豚足チョッパルが美味しい漢松にて夕食を摂った。

三日目は、JR天王寺駅で阿倍野・天王寺界隈の再開発を目視し、動物公園前～再開発された通天閣界隈～J

R新今宮駅～三角公園～西成警察署と歩いた。2011年度と同様、グループで歩く大学生は揶揄の対象ともなり、「見世物ではない」という声が飛ぶ。その一方では、「大阪をよくしてほしいから一生懸命勉強しろ」という励ましの声もかかった。線路沿いで3名の警察官が1名の青年に職務質問している現場に遭遇したので、やり取りの様子に注意するよう学生に指示してから、職務質問の声が聞こえるぎりぎりの距離を取りながら現場を通り過ぎた。荒い語勢で詰め寄るような職務質問の現場である。学生たちがふだんの生活圏では遭遇しないそれらの出来事を噛みしめつつ大通りに出ると、スタート地点の再開発のランドマークであるハルカスを遠くに見ることができるコースである。さらにJRを利用して芦原橋駅まで移動し、大阪人権博物館で丁寧な解説を聞きながら、展示物を見学した。大阪市政の介入による展示物の入れ替えについても、具体的に教えていただいた。

拠点の鶴橋に戻り、玉造の沖縄料理店ゆいまーるまで歩き、出来立ての自家製じーまみどーふ(ピーナツ豆腐)や、そーき煮つけ(豚スペアリブ)、チャンプルー等で夕食を摂った。学生たちが遠路勉強しに来たというと、鶴橋や玉造の店ではいろいろなサービスを提供してくれる。このフィールドワークでも、各店でソフトクリームやみかん、揚げたてのサターアンダギー(砂糖てんぷら)を振舞っていただいた。以上のように、2014年度はさまざまな団体や地元市民のご指導とご協力を得て、5カ年にわたって実施した「社会学野外実験」の集大成ともいえる行程となった(図6)。



図6 通天閣南本通にて筆者撮影

#### 4 今後の課題ー「一分」から始まる学びへの可能性について

「2 社会学における現地調査の基本」で述べたとおり、フィールドワークにおいては、資料・文献講読を含めた事前の情報収集と予備調査、仮説の確定、そして調査依頼と日時・場所の設定と予約が最重要の作業である。それら段取り仕事が全仕事の八分を占め、報告書のフィードバックが一分、現地で見えて歩く楽しい時間は一分程度ではないであろうか。この一分だけを独立させると、単なる遠足や物見遊山に終始してしまうことになる。

「3 『社会学野外実験』の計画と実施」では触れなかったが、事後学習の一環として、松山市内にある四国朝鮮初中級学校で開催される運動会（6月）、公開授業（11月）、学芸会（2月）等の行事への参加を呼びかけた。参加学生以外の学生も加わって毎年多数の学生が身近な地域の異文化に触れて楽しく学んでいる。異文化は、韓国や大阪、沖縄にのみ存在するのではなくごく身近にあること、見ようとしなければ見えないままで見過ごしてしまいがちであることに気付くきっかけになったであろうか。異文化側の人びとが私たち訪問者をなぜ手放しで歓待してくれるのか、その意味を真剣に考える学生がいたならば、ワンショット・サーベイで終るはずの出会いが、いつかどこかの場所や人間関係に連鎖していくかもしれない。

本稿により、短期間で集中的に実施した「社会学野外実験」においては、学生に「段取り八分」の取り組みを促す工夫が十分に出来なかったことが明らかになった。また、この「段取り八分」の基礎中の基礎を短期集中で学習するためには、基礎的なテキストと代表的な調査研究を数点講読するとともに、電話、メール等による依頼の方法、謝礼の方法等の実務のレッスンが必須となる。学年末に課外のレッスンを実施することがかなわず、担当者が全面的に介入を行ったことで学生は学習機会を失ったことになる。これは今後の課題として明記しておきたい。この段取りやフィードバックでの失敗は、せっかくの協力を得たフィールドに再訪を拒否される悲劇、協力者側にとっての「調査被害」を招きかねない。

学生各自に指示した資料・文献講読を含む自主学習については、ゼミナール形式の授業でよくみられるように、読む学生と読まない学生に分かれた。「私は本もほとん

ど読まない『無知』な学生である。それがどれほど恥ずかしいことなのかを知った。・・・たくさんの分野の本や雑誌、新聞やニュースを見て自分なりの考えを発言できる人になりたいと思う。・・・そして、日本の将来の事もしっかり考えていきたい。」と学生が感想レポートに書いた省察(reflection)と今後の学習志向を踏まえて、担当者が具体的なタスクを学生に再提示し、根気強く往還的な学習を促進することがもう一つの課題である。ともかくも毎回実質3日間、フィールドワークの時間と経験を共有した「社会学野外実験」は教員と学生がフェイス・トゥ・フェイスで意見を交換しながら、共同学習を行うことのできる絶好の機会であった。複数領域の学習と教育実習をほぼ同時並行する多忙な教育学部の学生にとって、「社会学野外実験」が学校以外の場所での学びに連なるドアのような意味を持ち得たならば、我々のフィールドワークには一定の成果があったということになろう。

[注]

- 1) 趙博「ちょっと歩いてみなはれ芦原橋界限」『月刊・お好み書き』1997年3月1日号。  
(<http://www.livex.co.jp/okonomi/9703/ashihara.html>)
- 2) 事前学習の文献として『猪飼野 追憶の1960年代』(2003)、『ニッポン猪飼野ものがたり』(2011)を推薦し、抜粋コピーを参加者全員に配布した。
- 3) 事前学習の課題は、(1)大田昌秀氏の著書の講読、(2)沖縄平和学習アーカイブ(<http://peacelearning.jp/>)の閲覧、(3)「さとうきび畑」等の沖縄にまつわる音楽や動画の視聴、(4)大田氏の著書を読んだの質問項目三点、の以上4点であった。(1)については、『沖縄のこころー沖縄戦と私ー』(1972)、『写真記録 これが沖縄戦だ』(1977)を推薦した。
- 4) 1990年3月に行われた琉球大学最終講義録「沖縄の平和と未来を考える」を参照(大田1996:4-7)。
- 5) 大学生と世代の近い在日コリアンの青年たちが作成した「在日コリアンと朝鮮半島を知るためのデータベース」(<http://www.key-j.org/keyword/index.html>)を提示し、事前学習を行うようメールで回付した。

[参考文献]

- 福武直、1984、『社会調査 補訂版』岩波書店。
- 趙博、2012、『パギヤんの大坂案内 ぐるっと一周[環状線]の旅』高文研。
- 曹智鉉、2003、『猪飼野 追憶の1960年代』新幹社。
- 姜在彦、1992、『日本による朝鮮支配の40年』朝日文庫。
- 金永子、2008、『韓国の福祉事情』新幹社。
- 桑畑洋一郎、2010、「ハンセン病者のくセルフ・ステイグマ」に関する一考察——沖縄のハンセン病療養所退所者を事例として」『現代の社会病理』(25): 117-132。
- 宮本常一・安溪遊地、2008、『調査されるという迷惑 フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版
- 中村文哉、2013、「ハンセン病罹患と『本質意志』の行方：ハンセン病者が家族を形成することの意味をめぐって」『社会分析』(40): 41-60。
- 大田昌秀、1972、『沖縄のこころ—沖縄戦と私—』岩波新書。
- 大田昌秀、1977、『写真記録 これが沖縄戦だ』琉球新報社。
- 大田昌秀、1996、『沖縄 平和の礎』岩波新書。
- 佐藤郁哉、2012、『フィールドワーク・書を持って街へ出よう』新曜社。
- 谷富夫・芦田徹郎編、2009、『よくわかる質的社会調査 技法編』ミネルヴァ書房。
- 谷富夫・山本努編、2010、『よくわかる質的社会調査 プロセス編』ミネルヴァ書房。
- 上野正昭監修、2011、『ニッポン猪飼野ものがたり』批評社。